

『誘春』

映像学科  
高山隆一

*Yu-Syun* (Comig Spring)

Department of Imaging Art  
TAKAYAMA Ryuichi

# 『誘春』

脚本・・・高山隆一

## 登場人物

上野結花子（30）・・・翻訳家。  
鹿島博美（21）・・・大学生。  
北里えり（30）・・・主婦。妊娠中。  
坂本良子（70）・・・香道の師匠。  
風吹明日香（30）・・・オートバイショップの女性店長  
春日京子（75）・・・未亡人。  
太田優子（30）・・・ライター。  
葉月玲子（29）・・・シングルマザー。  
葉月風香（10）・・・玲子の娘。

## ○博美の部屋（夜）

「フルーヴマシヨハ。」  
女子大生の部屋。  
華やかではなく質素な佇まい。  
テーブルを真ん中に向かい合っている博美（21）と結花子（30）  
博美は化粧や服装は地味であるが、美人で服の上からでもスタイルが良いのがわかる。  
結花子は博美に比べて細身ではあるが、やはり美人で品がある。  
博美、結花子と目を合わせないように恐る恐る話している。

博美「本当に遅っんですね？」

結花子、物静かに微笑みながら、

結花子「何が？」

博美、目を合わせず

博美「女の人間土の変なことじゃ・・・。」

結花子「何で？」

博美「いつも男の人に変な目で見られてるから。」

結花子「心配？」

博美「でも結花子さん見て少し安心したんです。綺麗だし。変な人じゃないって。（ぽてて）ごめんなさい。」

結花子「もし不安ならこのまま帰りましょつか？」

博美「いえ、もう遅いし。私がお願いしたんですから。」

結花子「心配しないで。私はどこででも寝られるから。」

博美、吹っ切れたように立ち上がり、

博美「今コーヒー入れます。」

立ち上がった姿がさらに博美のスタイルの良さを

強調する。

その後ろ姿をやさしく見つめる結花子。

## ○同 部屋

先ほどの部屋のテーブルが片づけられ布団が敷かれてある。

その布団の上に並んで座っている結花子と博美。

二人ともすぐ寝られる服装。

博美「シャワーしかなくてごめんなさい。あんまりお金なくて・・・」

結花子「大丈夫。それより先に使っちゃって私の方こそごめんなさい。」

博美「ベットもないし。子供のときから寝たことないんで何が怖いんです。」

結花子「『東京物語』みたい。」

博美「えっ？」

結花子「昔の映画。こっやって義理の母親と娘が話すの。」

博美「面白いですか？」

結花子「実はよくわからないの。名作って言われてるけど。私にはもう少し時間がかかりそう。」

結花子と博美、遠くを見つめて沈黙する。

## ○都心の夜景

## ○同 部屋

結花子と博美、布団の上で向かい合っている。

結花子「よかつたら、服脱いでも構わないけど。」

博美「ごめんなさい。それは・・・」

結花子「ごっそ。」

博美を布団に促す結花子。

博美、恐る恐る布団の中に入る。結花子の背をむける形。

結花子、布団の外から、やさしく、

結花子「やっぱり帰りましたよつか？」

博美「いえ、結花子さんが帰っちゃった方が怖いから。」

結花子「一晩このままでも構いませんよ。」

博美「ごめんなさい。本当にごめんなさい。」

## ○台所の花

## ○同 部屋

先程と同じ体勢の二人。

博美「ごめんなさい。私が呼んでおいて。私結局何もできなくて。いつもなんです。いつも。」

結花子「あなたみたいなきれいな人が・・・」

結花子、シーツから出ている博美の肩を軽く触れ

る。

博美、結花子の方を向く。

博美「私、この身体（からだ）だめなんです。みんなは美人だとかスタイルいいとかいうけど私この身体嫌なんです。怖いんです。でも誰もわかってくれない。自意識過剰とか、思わせたふりだとか言われて。自慢する人もいるけど私は本当にだめなんです。」

結花子「・・・。」

博美「地元にいるのが嫌で東京に出てきました。東京なら人が多くて私なんか見えなくなっちゃおと思ったんです。でも東京も同じでした。」

結花子「・・・。」

博美「私だててかわいい服着たいし、男の子とむき合いたいんです。でもそれが全然何にも出来ないんです。みんなは変に思つかもしれないけど、こんな身体だから何もできないんです。」

博美、泣きじゃくる。

結花子「そこに行っていていい？」

博美、泣きながら頷く。

結花子、布団に入る。

ゆっくり博美を抱き込む結花子。

腕を博美の首の下に回しこみ巻き込む。

二人ともじっとしている。

博美「結花子さん？」

結花子「何？」

博美「私の胸邪魔じゃないですか？」

結花子、笑いながら、

結花子「ちよこね。」

博美、笑顔から真面目な顔になり、

博美「今日、結花子さんに会えてとてもよかったです。

私の身体を慈しんでくれた。」

結花子「私は何も。あなたが自分の身体を慈しんだの。」

見つめあう二人。

博美、ゆっくり服を脱ぎだす。

結花子もそれに応じるように服を脱ぎだす。

結花子の肩に蝶のタトゥー。

博美には見えない。

結花子の胸にうすくまる博美。

それをゆっくり受け止める結花子。

結花子「慈しむ・・・。」

結花子、博美微笑む。

博美「お花ありがとっしやいます。」

結花子「いつもそうしてるから。…それよりもっねむくない？」

博美「はい、なんかほっこしちやっこ。」

結花子「私はかまわないから・・・ずこしてるから。」

博美「はい・・・。」

ゆっくり目を閉じる博美。

その顔をじっと見つめる結花子。

ゆっくりと博美の髪の毛を撫でる結花子。

小さな揺れが起き、家具が微かに揺れる。

手の動きを止める結花子。

揺れに気付かず眠り続ける博美。

## ○台所の花

微かに花瓶の水が揺れている。

## ○都心の朝焼けの風景

## ○同 部屋（朝）

布団は片づけられ、テーブルを間に向かい合っている結花子と博美。

テーブルには昨夜の花。

二人の前にはそれぞれマグカップ。

博美「ごめんなさい。カップーつしかなかつたら。それ１００円シヨップのなんです。もかつたら持っていてください。」

結花子、笑顔でうなずく。

博美「でも私が言うのもなんですけどネッパで『蒸し寝』します。女性のみ。当方女性』なんて。」

結花子「話せば長くなるけど、今のところは大丈夫。変な力が働くみたい。」

博美「巫女とか？」

結花子、博美笑う。

博美「もうこの身体で大丈夫ですよね。」

結花子『『愛のゆくえ』ね。』

博美「えっ？」

結花子「うっん、なんでもない。」

博美「まだ連絡してもいいですか？」

結花子「構わないけど、いままでそうやって誰も連絡してきてくれた人はいないの。」

博美「私は必ず・・・。」

結花子「そうね・・・。待ってるわ。」

ちみじそうな結花子の笑顔。

## ○和室

六畳ほどの日本間。

香炉。

結花子、質素なワッピース姿。

和服姿の坂本良子（アオ）。

他、平服の２人の女性。

香元の女性、香炉の準備をしている。



結花子、立ち上がり、えりの乱れたストールを直してあげる。

えり「じめんなさい。最新型のバイクじゃないし、かといって女の子が乗るようなバイクじゃないからよくわかられました。でも怪我したことないんです。この子はいつも私を守ってくれました。」

結花子「お父様もお喜びですね。」

えり「(お腹をさすりながら) この子ができてからバイクに乗れなくなったら、主人も前からいい顔していなかったんでお天気のいい日と主人のいる日は(バイクを指差し、笑いはから)「こちの子ですわい。日回ほこにやせてあげるんです。その角の八百屋さんのお兄さんがバイクに詳しくて出し入れしてくれるんです。めっくりにの子を育てあげます。」

結花子「御身体大事になさって下さい。」

えり「ありがとうございます。私の方ばかり話してしまつて。お引止めしてしまつて。」

結花子「私にそおしいいコトアをいください。」

えり、豊顔になり、

えり「実は内緒ですが、私このバイクにまた乗る計画立ててるんです。主人にも内緒です。赤ちゃんが寝ている朝日の出るころ、たったひとりで・・・。」

結花子「素敵な計画ですね。大丈夫、そのお返持ちさえあれば。」

結花子とえり、バイクを眺めている。

## ○結花子のマニシヨハ

2「ロクほどのマニシヨハ。

書棚が多く、洋書、和書共に並んでいる。

特に事典のような百科事典、英和大辞典、和英大辞典、英英辞典などが並んでいる。

結花子、キッチンへのテーブルにもぐるも。

戸棚の食器類が微かに震える。

結花子、はっと目を覚ます。

## ○バイクシヨツの前

結花子、一台のバイクを見つめている。

バイクには「中古車」の札が張られている。

バイクは量り250CCのオフロードバイク。

## ○バイクシヨツ店内

店内は簡素だが清潔感がある。

新車のバイクが数台飾られている。

店内からシーンとメーカーのシャインバー姿の明日香(30)が結花子を見ている。

明日香立ち上がる。

## ○同 店外

店内から出てきた明日香、結花子に話しかける。

明日香「もしもここならお店の中に入りませんか？まだ外寒いですし。」

結花子「じめんなさい。」

明日香「謝ることはしてないんですよ。見てて減るもんじゃない。押し売りなんかじゃありません。中にコーヒーもあるし。あんまりおいしくないけど。」

結花子「でも・・・。」

## ○同 店内

カウンター越しに明日香と結花子が向かい合っている。

カウンターにはマグカップが2つ。

明日香「今日は主人は走りに行きました。平日なんて暇なんです。今は女の子もバイク乗るみたいですからうちにはめったに来ないんですよ。だから珍しくって。あつ、じめんなさい。」

結花子「じ迷惑ではありませんでしたか？」

明日香「全然。バイク屋なんて売れなくて当たり前前の店売ですから。バイク好きなんですか？」

結花子「よくわからないうです。ある人がオートバイの話してくれたんです。」

明日香「恋人？」

結花子「女性です。素敵なお話でした。」

明日香「幸せな方ですね。」

結花子、少しためらいながら、

結花子「私でも乗れるんですか？」

明日香「私が言うのもなんですが、バイクは危ない部分もありますから。あなたのようの方が怪我でもされたら大変です。」

結花子、残念そうに、

結花子「そうですね。」

結花子、思い直したように

明日香「表のバイク、気に入ったんですか？あんまり女の子が好きになりそうなんじゃないですけど。まして2ストだけ。」

結花子「2スト？それって乗れないんですか？」

明日香「じめんなさい。難しいこと言っちゃった。」

二人、何も言わずコーヒーを飲む。

じつと結花子の手を見つめる明日香。

明日香、突然、しかもめっくりにいなり、

明日香「あのバイク、乗ってみますか？」

結花子「いいんですか？」

明日香「それはあなた次第です。でもあなたにバイク知ってもらいたくなりました。」

結花子「ありがとうございます。」

明日香「でも、慌てないで。バイクは自立できない乗る物です。一人で立てないんです。それを支えてあげるのがあなたの役目です。その役目はもしかしたら命がけかもしれない。でもそのおれとしてバイクはあなたをどこまでも連れて行ってくれます。誘って（いよなこて）くれるんです。」

結花子「慈しむ。誘う。」

明日香「えっ？」

結花子「そうですね。ゆっくり行きます。」

明日香「私の知っている女性の教官がいます。その人なら大丈夫。連れてあげます。」

結花子、不安そうに

結花子「本当に大丈夫でしょうか？」

明日香「宇宙飛行士になるよりか簡単です。」

結花子「イエガーみたいですね。」

明日香「バイクは空は飛べませんけどね。」

結花子「どこ存じなんですか？」

明日香「ええ、『フットスタッフ』。」

結花子「でも、最後は一人ぼっち。」

明日香「バイクに乗るのも同じです。」

結花子「・・・。」

○外に置いてあるオートバイ

○古い一軒家 外観

○同 応接間

古いがきちんと清掃され清潔な住まい。やはり古いか品のいい調度類が置かれている。

結花子と京子（ア）が応接間のソファーに座っている。

京子、清潔で品があり、昔の上品な美貌を今も残わっている。

ソファーのテーブルの上には英国式のアフタヌーンティーの用意がしてある。

結花子「本格的ですね。こんなにきちんとしたアフタヌーンティー初めて見ました。」

京子「父の仕事でヤキウスにいて。こんなにゆっくりできません。見よう見まねで。あつ、冷めないようにしてぞ。」

結花子「ありがとうございます。でも素敵なお住まいですね。」

京子「残ったのはこの家と主人の本の山だけです。主人は私には分からない言葉の本を読んでいたわ。」

結花子「・・・。」

京子「さあ、召し上がりてください。でも多すぎたかしらね。久しぶりなんで少し張り切りすぎました。」

○カバーのかかったテーブル

○同 応接間

結花子、京子に恐る恐る尋ねる。

結花子「大変不躰なお願いですけれども、御主人の書斎掛画させていただけませんか？」

京子、少し驚いて落ち着きなおす。

京子「ええ、構いません。毎日掃除はしてありますから。でもおもしろくありません。私にはさっぱりわからないものばかり・・・。でも見たこともこうやるなら人がいるのなら主人も喜ぶかも。」

結花子「ありがとうございます。」

同 書斎

和書や洋書で埋もれている部屋。

窓から西日が差している。

入口に立つ結花子と京子。並んで立っている。

京子「家にいるときはほとんどここから出ませんでした。」

結花子「・・・。」

京子、何かを察して、

京子「私、古くわけてますから。好きにしてかまいませんから。触って困るものもないし。ゆっくりしてください。」

結花子「ありがとうございます。」

結花子、手前のテーブルに平積みになれた本をめぐってみる。

結花子「これ、二つゝ語ですね。」

京子「よく御存じね。お医者様へ。」

結花子「いえ、昔教えてくれた人がいたので・・・。」

京子「珍しいわね。その方もあなたも。主人はもう誰も使わなくなった言葉をこの部屋で一人のきりで読んでいました。もう誰にも見向きもされない言葉・・・。」

京子、笑顔にない

京子「おかげで定職なんかなくて雇われの講師ばかり。お給料はみんな私のわからない言葉に代わっていきました。言葉を買うために働いていたようなもの。」

結花子「言葉を買う・・・。」

○同 書斎

結花子、書棚や平積みになった本が横たわっているテーブルの間を指先で本をなぞりながらゆっくり歩く結花子。

結花子、二つゝ語を独り言で呟く。



結花子「scelesta, vaete! quae tibimanet vita? . . . . (罪深い女よ、呪われよ。いかなる人生がもたらすを待ち受けているのか . . . .)」

時折、立ち止まり、平積みになれた本をめくってみる。

机の前に来て椅子に座る。

周囲とは不自然にきれいに整頓された机上。

椅子に座る結花子。

岩波文庫の『銀の匙』が十冊ほどおいてある。その一冊をめくってみる。ところどころに折り目が付いている。

結花子、折り目の所を順番にめくり読み始める。

#### ○同 応接間

食器類を片づけている京子。

一瞬、動きを止め、物思いにふけるがまた仕事を続ける。

#### ○同 書斎

結花子、折り目のついた部分をめくりながら本を読んでいる。

#### ○同家 中庭 タ景

#### ○同 書斎

結花子、ゆっくり本を朗じる。

結花子、立ち上がり、扉の方へ向かう。

ふと立ち止まり、床にゆっくり仰向けになる。

しばらくそのままで天井を見つめる結花子。

結花子の目に涙がはれる。

#### ○同 寝室

布団の前で並んで正座している結花子と京子。

二人とも浴衣姿。

京子「じめんなさい。若い人に浴衣はなんて。」

結花子「いえ、そんなことはないです。」

京子「私が着慣れているから。それに家にはそれしかない。実は娘がいたらこんなんじゃないかなあと思っています。」

結花子「私でよければ」

京子「今日、あなたと初めてお会いして安心したの。おもしろい、品もある。」

結花子「そんなことはありません。だめなんです。わたし。」

京子「だめ？」

結花子「すみません。そのことは誰にも言わないで済めたいんです。」

京子「じめんなさい。いいの。もう聞かないわ。」

結花子、申し訳なさそうに

結花子「書齋、素敵でしたね。」

京子「ありがとう」

結花子「でもなぜあんなに『銀の匙』が？」

京子「時々あの部屋であの本を取り替えながら読むんです。もちろん中身はみんな同じ。主人の本は何もわからなかったけれどあの本は好きでした。あんな美しい本は読んだことありませんでした。じつはあの本はみんな主人が買ってきてくれたんです。亡くなる前から頻りが始まっていました。主人は私を置き去りと本屋にあの本があると必ず買ってきてたんです。」

結花子「 . . . .」

京子「あそこでゆっくりあの本を読んで書いた人の子供の頃と主人のことを思っています。」

結花子「私もあの本好きです。」

京子「あなたは本道に言い方でいらっしゃる。」

しばらく沈黙の二人。

京子「『東京物語』って御存じ？」

結花子「えっ？」

京子「こんなシーンがあったんですよ。」

結花子「お好きなんですか？」

京子「この間、映画館で。めったに行かないんですけど。でも私には難しすぎるみたい。」

結花子「難しい？」

京子「あの映画を理解する歳を逃してしまっただいたい。お若いあなたの方がお分かりになるのかもしれないわね。」

結花子「 . . . .」

京子「あ、そう、お花ありがとうございました。」

結花子「いいんです。いつもしてるんですよ。」

京子「いつもなの？大丈夫？」

結花子「いまのところは . . . .」

京子「あなたを守ってくださる方がいらっしゃるのね。」

#### ○応接間の花

#### ○同 寝室

二人分の布団。

別々に寝ている二人。

結花子「これでよろしいんですか？」

京子「ええ」

結花子「これでいいわけなくて . . . .」

京子「いいの。結花子さんも眠りたくなったら眠って構わないのよ。」

結花子、京子に

結花子「そちらに行っていていいですか？」

京子「いいよ。無理しなくて。」

結花子、少し苦しげに

結花子「そうじゃないんです。私が・・・」

京子、結花子を見つめ、

京子「ええ、それなら。」

結花子、自分の布団を出て、京子の布団に入り込む。

うはらへ、うつうつしている二人。

結花子「さっき書斎で読んだ『銀の匙』思いついたんですよ。折り目のついたところに。」

京子「・・・」

結花子「今日は遅いんです。今日は私が包むんじやなく、私が京子さんに包まれたいんです。じゅんなさい。変なことを。」

京子、やさしい笑顔で

京子「よくはわからないけど・・・でも私がしてあげられるのはもう今日だけです。ここには忘れ去られていく場所です。主人も、主人の書斎も。あの本たちも。そして私も。あなたのような聡明な方がいらさうやるにはもう朽ちています。今夜限りの出会いです。」

結花子、頷く。

結花子、枕元の『銀の匙』に気付く。

結花子「ここに読んでいただけますか？」

京子、本を手にとり適当にページを開き読み始める。

京子「『きれいに書目のたった仕事場のあとを見まわると今まで賑やかさにひきかえしんじんとして夕霽がかかってくる。わたしは残り惜しく呼びいれられてまた明日の朝をまつ。そのように湧きたつ木香に寄ってなんとなく爽やか気持ちになりながら日に日に新しい新居が出来てゆくのを不思議らしく眺めていた。』（寂しく笑いながら）皮図ね・・・」

結花子、本をゆっくり取り取り、京子の両手を自分の両手に包み込む。

結花子「じゅんなさい。私は無駄なものばかりで肝心なものがありません。京子さんを助ける肝心な力が・・・」

京子「大丈夫。今日はありがとう。」

京子、ゆっくり目を瞑る。

京子「じゅんなさい。今日は少し疲れたみたい。」

結花子「うこそ、お休みなさい。」

京子の顔を見つめる結花子。

穏やかな京子の寝顔。

○同 応接間

家具や花瓶が小刻みに揺れる。

同 書斎

本棚や平積みされた本が小刻みに揺れる。

同 台所

食器類が小刻みに揺れる。

同 寝室

家具が小刻みに揺れる。

結花子、ゆっくり目を瞑る。

○道の駅

穏やかな日差し。

平日で閑散としている。

ぐんちに座っている結花子。

近くには先日見ていたオートバイ。

身体を伸ばす結花子。

周囲を見渡す結花子。

周囲には、老夫婦や若い家族連れ。

突然、缶コーラーを差し出す手。

驚く結花子。その手の先を見る。

缶コーラーを差し出す優子（30。）

○同 ぐんち

先程のぐんちに座っている二人。

お互いの手には缶コーラー。

優子「今日のバイクの機嫌はいかがですか？」

結花子「えっ？」

優子「2ストは気難しがり屋だから。強情だけどそのくせ繊細で。」

結花子「ええ、今日は機嫌よさそうです。でも私がダメです。」

優子「全然。入る時から見てた。落ち着いてた。よく手なずけてる。私なんか何年かかったか。」

結花子「オートバイ乗られるんですね？とれですか？」

優子、恥ずかしそうに指差す。

指先には結花子のバイクの何倍もあるフルハーブの大型オフロードバイク。

結花子の驚いた表情。

結花子「あれを？」

優子「転んではかりだけよ。走っている時より転んだ時の方が多いくらい。もう慣だらけ。バイクも私も。でもなぜか手放せなくて。」

結花子「お好きなんですね。」

優子「傷の付けあいなんだからなぜか一緒にいたくて。転ぶのなんて最初の一回だけ。あとは運命共同体みたいなもの。」

缶コーラーを飲む優子。



優子「ここに休んでたら珍しいバイクが入ってきたから眺めてたの。そうしたら女の人で。あんまり女の人が乗るバイクじゃないし。じめんなさい。こつこつ性格だから。まして2ストだし。それにこんなきれいな人なんで・・・。」

結花子「オートバイのことはよく言われます。私のことは言われたことはないですけど。それにまだに2ストってわからないんです。」

優子「大丈夫。そんなあなたが乗っているんだからきっといいバイク屋さんなんですよっね。」

結花子「素敵な方です。」

優子「イケメン？」

結花子「女性の方です。」

優子「やっぱり。」

結花子「えっ？」

優子「なんとなくそんな気がして。あなたもバイクもその方に大切にされてるんだなって。」

結花子「・・・」

優子、笑顔から真面目な顔になり、

優子「無理しないでね。」

結花子「・・・」

優子、笑顔に戻る

優子「私はもう少し走りに行く。新型の若造と勝負してくる。いつか勝負にならないのわかってるけど。負けは覚悟。でもあなたはあなたのペースで。あの絶滅危惧種、可愛かってあげて。」

結花子「ありがとうございます。お会いできてよかったです。」

優子「私も。もうと早く会いたかった・・・。でも次の約束はできないの。」

さみしそうな優子の笑顔。

結花子、やさしく笑顔で

結花子「構いません。いずれ何処かで・・・。」

優子「ええ、いずれ何処かで・・・。」

## ○同 道の駅

軽やかにバイクを扱って出ていく優子。

それを見送る結花子。

## ○明日香のバイクシヨシアの店

結花子のバイクが置いてある。

## ○同 店內

カウハターを挟んで結花子と明日香。

テーブルにはそれぞれのマグカップ。

結花子のマグカップは博業から貰ったもの。

明日香「そっさ、来るとき見てもらったけど随分身体案外かくなりましたね。」

結花子「わかるんですか？」

明日香「ちくちくおけてます。」

結花子「(ちよこ驚いて) 今回、同じことを言われませんでした。」

明日香「男の人ですか？結花子さん美人だから。」

結花子(ささげながら)

結花子「私のバイクは女の子の乗るオートバイじゃないですから。誰も話しかけてくれません。」

明日香「じめんなさい・・・。でもあのバイクは幸せです。結花子さんのような人に乗ってもらえよ。ほんとあのバイクは捨てられてしまったんです。朽ちるんです。」

結花子「朽ちる？」

明日香「特に結花子さんのバイクはもつ作られていません。H25から今のH25までのもつが短いです・・・。でもあのバイク、古くても結花子さんが生きる道を見つけてあげた。」

結花子「そうですね。救えてあげられてよかった・・・。そっさの方もそんな人でした。」

明日香「まだそんな人いるんですね。」

結花子「きれいな方でした。ちよこそれで・・・。」

でもさっ、心意気のある方でした。」

明日香、笑いながら

明日香「今度『シニア・ト・ベルシヨシア』ですか？」

結花子、驚いて

結花子「明日香さん、本当にオートバイ屋さんなんですか？」

明日香、笑いながら

明日香「ただ他人より暇なだけです。それよりちよこにお見せしたいものがあるんですけど・・・。」

## ○同 店外

明日香、結花子のバイクをいじりながらバイクを抜き取り、結花子に見せる。

明日香「これはバイクって言う部品です。しかも結花子さんが帰った後、見てたんです。最初はカウハターだとよく唄っていられたなあって。でもカウハターきれいに焼けるものになってきて。今日くらいお見せしてもらいかなって。ね、きれいにカウハターに焼けてる。パイプハットに入れてメロハリーもきもちり開けて走ってる証拠です。今日は気持ちよかったんじゃないですか？」

結花子「じめんなさい。明日香さんの言ってること全然わからなくて。でも今日は私がしたらしいことを先にカーナビがしてくれてたもつな気がします。」

明日香「ちやんと見てくれてるんですよ。このバイク、

結花子ちゃんのじい。」  
結花子「明日香さんのおかげです。」  
明日香「ありがとうございます。それより身体いかがですか？」  
結花子「そうですね。少し疲れたかもしれませんが。」  
明日香「今日はクーリィングには少し寒かったかもしれませんがね。ゆっくりお風呂に入って温まってください。」  
結花子「ありがとうございます。あー、そう、今日あった人、明日香さんのこと褒めてましたよ。」  
明日香「えっ？」  
結花子「いえ、何でもありません。クーリィングをそこそこまでした。またオーバードお願します。」  
明日香「も預かりします。お気を付けて。」  
結花子の後姿を見送る明日香。

○同 店内  
明日香、結花子のスウェットをかたずけようとして、ふと手を止め、スウェットを見つめる。

○結花子のクローゼット 脱衣所  
上着を脱ぐ結花子。  
肩に蝶のタトゥー。

○同 浴室  
シャワーを浴びる結花子。  
肩のタトゥーに水がかかる。  
結花子、急に顔を曇らせ、身体を丸める。  
全身にシャワーの水がかかる。  
泣き始める結花子。  
やがてそれが号泣に変わる。

○同 キッチン  
テーブルや家具、食器類が大きく振動する。

○同 居間  
書棚や本が激しく揺れている。

○同 浴室  
バスタブのお湯が大きく波立つ。  
結花子、浴室の床に身体を丸めてタトゥーを隠しながら、  
結花子「だめ。来ないで。」  
バスタブの波、静かにおさまります。

○同 浴室  
結花子、バスタブに身体を浸している。

結花子、独り言を呟いている。  
結花子「汝、理なくして我を抜くことなかれ。着れなくして我をおちむることなかれ。」  
結花子、唇を噛み締める。  
結花子「しかし、我、知性と品性あるものにのみ仕えんとす。」

○巨大な滝戸

○同 キッチン  
湯上りの結花子。  
肌のキザミ、ホールとシェード、ペンダライト。  
テーブルの上に割れた花瓶と花。  
結花子、割れた花瓶の破片を拾い始める。  
指先から血が出る。  
結花子、何もせずじっと見つめる。  
流れ続ける血。  
血が掌まで来た時、手をゆっくり握りしめる。  
床に倒れ込む結花子。  
手から流れ続ける血が床にこぼれた花瓶の水と交わっていく。

○和室  
香炉。  
客から、6名ほど。  
結花子、二重程香炉を手の中で回し香炉をゆっくりに顔に近づけ香を嗅ぐ。  
二重ほどゆっくりに香を嗅ぐ。  
香炉を持つ結花子の指先の微かな傷を見つめる良子。

結花子「本香一炉」  
結花子、香炉を畳に置き、隣人に渡す。  
良子、「輪挿しを見て、」  
良子「今日のお花は？」  
結花子「私が。太郎冠者と黒蜥蜴です。」  
良子「いい組み合わせね。」  
良子、心配そうに結花子を見つめる。  
「輪挿しの花と花器。」

○結花子のクローゼット  
居間のテーブルで英文の書籍を見ている結花子。  
英語関係の辞典や日本語の辞典が置いてある。  
翻訳の作業をしている結花子。  
ノートパソコンでキーボードを叩いたり、辞典のページをめくっている。  
作業を止める結花子。

パソコンの画面を切り替える結花子。  
そこには『添い寝します。女性のみ。当方女性。』  
と文章だけの単純なレイアウト。  
結花子、さらに画面を切り替える。  
画面に「もしよろしければお願いできますか。連絡先×××」とある。  
その画面をじっと見る結花子の顔。

#### ○田園地帯の道

大きな建物のない田園地帯の一本道。  
葉月風香（10）が二つトセルを背負って歩いている。  
黒髪が長く、美しい顔立ち。  
葉月玲子（29）の声（オコ）  
玲子「実は私じゃないんです。」

#### ○玲子のアパート

高級感はないが家具等が整えられ整理されている。  
結花子と玲子、キッチンでテーブルで向かい合っている。  
玲子、長身でモデルのような美人である。  
結花子「？」  
玲子「子供なんです。私の。大丈夫です。小学生の女の子です。」  
結花子「私は大丈夫です。でも、ええと……。」  
玲子「風香って言います。10歳です。」  
結花子「私じゃなくて……」  
玲子「だめなんです……抱けないんです……私……。」  
結花子「……。」  
しばらく沈黙が続く。  
結花子、ふと棚を見るとそこに『銀の匙』の文庫本が並んでいる。

結花子「『銀の匙』ですね。」  
玲子「高校の時、先生から。高校の時就職したの私だけだったんです。私も大学行くつもりだったんですけど家がうまくいなくて。こんな町ですから大した就職先もなく。そんな私に先生が就職の御祝いに下さったんです。私だけこの町に取り残されました。（玲子、気を取り直して）忙して本を読む暇なんてないんですけどあの本だけは好きで何回も読むんです。だからもうほろほろ。安い本だから買えるんですけどなぜかあの本ばかりで。」  
結花子「私も好きです。」  
玲子「あの本のことを知ってる人に初めて会いました。あなたの周りにはあの本を知ってる人がたくさんいらっしゃるんじゃないかな。うらやましいです。」

結花子「風香ちゃんに教えては？」  
玲子、急に顔を曇らせ  
玲子「だめなんです。私。」

#### ○鉄道の線路

単線の鉄道の線路。  
風香、線路に耳を当てている。  
玲子の声（オコ）  
玲子「私はあの子を産んでしまったんです。」

#### ○同 アパート

玲子「結花子さんでしたよね？」  
結花子「はい……。」  
玲子「あまり人と喋らないんで、どう説明していいの？」  
結花子「説明はいいません。女の子なら大丈夫です。私は娘さんと一緒に寝てあげるだけですから。」  
玲子「いえ、あなたとお会いしたら話したくなかったんです。他人の話なんて退屈ですよっけと……」  
玲子「玲子さんがお話ししたければ……」  
玲子「私だけがこの町に置き去りにされました。こんな町です。働くところなんてそこありません。でも親戚の伝手で町工場の事務に就職できました。でも事務とか全然わからなくて。毎日残業ばかりでした。ある日、社長の息子さんと二人きりで残業していました。その人はいつも無口で。でも女子社員には人気があったみたいで。奥さんもう子供もいて。」

#### ○農道

風香、大股でスキップする。  
風香「す・ん・こ・う・イ・ト……」  
玲子の声（オコ）  
玲子「その日、計算が合わなくて何回もやり直して。帰日も遅くなるし。焦ってたんです。計算に集中していた。後ろに……」

#### ○同アパート

結花子「もうそれ以上は……」  
玲子、口調を強めて、  
玲子「ここでやめてしまっ方がつらいんです。  
私初めてだったんです……男の人の力があんなに強いなんて……最初はなんだかわからなくて……服なんて簡単に破かれて……足だって簡単に開かれて……いじめなぞい。その人はすごく嫌いな人でした……きつと普通の女の人は初めての時は温かくて柔らかい思い出なんじゃないかな。私には固く冷たい記憶がありません……。」

結花子「もしかして〜」

玲子「ええ、風香はその時の子供です。」

結花子「でも・・・」

玲子「ええ、おっしゃりたいことはわかります。でもその時は2か月前まで女子高生だった子供でした。」

結花子「どなたか・・・」

玲子「誰にも頼れませんでした。親にもです。何日も部屋に閉じこもっていました。誰も来ませんでした。私と部屋だけが宇宙全体のようでした・・・」

#### ○玲子の部屋（回想10年前）

薄暗い部屋。

ぐしょぐしょくまるまる8歳の玲子。

ほんのり全裸に近い状態。

ベッドの隙間から一通の封書が滑り込んでくる。それを見つめる玲子。

#### ○同 部屋

ぐしょの上で手紙を読む玲子。

玲子の声（オコ）「それからです。毎月お金が入るようになったのは・・・」

#### ○玲子のアパート（現在）

玲子「毎月、家族が食っていくにも余るくらい・・・。お恥ずかしいんですけど、私、返せなかった。こんな町です。働いてもたいたお金になりません。男の人を相手にする仕事だけは絶対嫌だった。そんな時です。風香の妊娠を知ったのは。」

結花子「御産みになったんですね。」

玲子「そんなえらいことじゃありません。産まない勇気がなかっただけです。」

うはしの沈黙。

玲子「一回だけ手紙出したんです。その人に。風香の妊娠のこと。堕せと言われて私が安心したかかったんです。」

結花子「なぜ・・・」

玲子「彼から返事が来ました。一言、産みなさい。その翌月から倍近いお金が送られてきました。彼とのやり取りはこれで最後。ただ毎月通帳にお金の数字が印刷されるだけ・・・。」

玲子、気を取り直して

玲子「今になって考えれば黙って堕すというべきなのかもしれない。警察にだつて・・・。でもするんです、私。命の尊厳なんて後付けなんです。」

結花子「玲子さん・・・」

玲子「形ばかりに役場でアパートをしています。今のアパートで十分です。風香は何も不自由していません。でも

それはやっぱり・・・。しもお金は私がいなくなつてからの風香のためです。ただひとり生きていく。それがあの子の運命ですから・・・。」

玲子、うつすら涙を浮かべる。

玲子「風香はいい子に育ちました。母のおかげです。でも・・・私、一回もあの子に触れたことないんです。美しい子です。頭もいい子です。みんなあの子を好きになります。でも私は、あの子が怖いんです。あの時の床の冷たさが風香を見る時感じるんです・・・風香は私の恐怖を背負っているんです・・・すいません、コーリー冷めちゃって。」

結花子「大丈夫です。でも私ができることはせうじない・・・。」

玲子、結花子の言葉を遮り

玲子「私はそんなことできません。豊待の方が取ったのかも・・・あの子に触れて・・・。」

#### ○アパート トイレ

風香、立ち尽くす。

緊張した顔。

#### ○同 アパート

トイレのチャイムの音

玲子「風香です・・・人匠手にある人がしくなつたことを知りました。でもお金は送られてきます。なぜだかわかりません・・・。あの人は一生あの子の美しさを見るにしができなかった・・・。あの子の美しさは私のたった一つの復讐でした。でも今度は私が苦しみ種なんです・・・。」

玲子、立ち上がる。

#### ○同 アパート（夜）

風香の部屋。

二人分の布団。

結花子、風香の髪を梳かしている。

結花子「ごめんね。おはさん、急に泊まることになって。」  
風香「大丈夫。でもおはさんじゃないよ。お嬢さんだよ。とてもきれいだもの。」

結花子「ありがとう。風香ちゃんもきれいだ。まこと美人さんになるわよ。お母さんもきれいだじ。」

風香「お母さんにはかなわない。すごいきれいだもの。」

結花子「お母さん、好きなんだ。」

風香「好き。でも私きれいじゃなから。お母さん・・・」  
悲しげな風香。

結花子、髪を梳くのを止め、風香を後ろから抱へり、やさしく抱きしめてあげる。

風香、びっくりして結花子の手を払いのける。  
怯える風香。

結花子、もう一度後ろから風香を抱く。

風香、少しづつ怯えが解けゆっくり結花子の腕の  
中に抱かれる。

## ○同 部屋

向かい合っている結花子と風香。

結花子「もう寝る？それともお母さん待つ？」

風香「お母さんはいつも隣の部屋だから。」

結花子「でも今日は私がいるから来てくれるかもしれない  
いっ。風香ちゃんと同じ布団で寝てもいい？」

風香、不思議そうに

風香「いいけど。」

## ○同 部屋

一つの布団の中で向かい合って寝ている二人。  
隣に空いた布団。

結花子、キヤミソール姿。

肩に蝶のタトゥー。

風香「お姉さん、あのお花持ってきてくれたの？」

結花子「そう」

風香「きれい。」

結花子「ありがとう。」

風香「お姉さん、何してるの？」

結花子「外国の言葉を日本語に直しているの。」

風香「翻訳だね。」

結花子「風香ちゃん、頭いいね。」

風香「外国行ったことある？」

結花子「何回か。」

風香「風香も行きたい。」

結花子「大人になったら。」

風香「この間うっとうで見たの。外国の人がきれいな服着  
て。ああいう人、モテルっていいんですよ。でもお母  
さんの方が全然きれいだっだ。お母さん、モテルにな  
れはいいのに。」

結花子「そうね。おかあさん、きれいですもんね。」

風香「お姉さんもきれいだけどお母さんにはかなわない。」

風香、あくびをして目をこする。

結花子「大丈夫？眠くない？」

風香「明日休みだから。それにこんな風にして寝たこと  
ないから。」

結花子「驚屈じゃない？」

風香「大丈夫。女の人ってこんなに胸大きくなるんだ。」

結花子「私のは小さいまづ。もっと大きい人もいるわよ。」

風香「お母さんはどうかな？」

結花子「お風呂とか一緒に入ったりしないの？」

風香「全然。小さい頃は入ったかもしれないけど。もう  
お母さんが抱っこしてくれたことなんにも覚えてない  
の。」

風香の顔を見つめる結花子。

風香「お姉さんに秘密教えてあげる。」

結花子「なに？」

風香「お母さんの大切な本、お母さんのいない時、読ん  
でるの。」

結花子「どれ？」

風香「『きんのぞし』。」

結花子「わかるの？」

風香「ぜんぜん、漢字がわからない時は写して学校へ持っ  
ていって先生に聞いたり、辞典で調べるの。」

結花子「『匙』って読めた？」

風香「読めなかった。先生に聞いたの。でも先生も読め  
なくて。パソコンで調べてもらった。」

結花子「中身わかるの？」

風香「よくわからない。昔の男の子の話をしたいけど。」

結花子「なんでそんなにうっとうしてるの？」

風香「お母さんのこと知りたくて。お母さんが大切にし  
てるもの私も知りたくて。」

結花子「風香ちゃん・・・」

風香「私、お母さんみたいに美人じゃないし。お母さん、  
時々、私を見て泣くの。私悪い子なの・・・。」

風香、自分から結花子の胸に抱かれていく。

ゆっくり抱いてあげる結花子。

結花子の身体に胎児のようこまるまる風香。

風香、呟く。

風香「おかあさん・・・」

結花子、風香を身体全体で包み込む。

足も曲げて一つの卵のようになる。

## ○同 別室

テーブルの前で一点を見つめている結子。

ゆっくり、カータイカンを脱ぎアソックスのボタッ  
をはずし始める。

## ○同 風香の寝室

風香少し顔を上げ、

風香「お姉さんの肩に・・・」

結花子「蝶ね。」

風香「どうしたの？痛い？」

結花子「うっかん、これはね、大切な人がいれてくれたの。  
私を守ってくれるようにして。」

風香「恋人？」



結花子「もっと大切な人。その人だけが私をわかってくれたの。その人が私をつらいところから守ってくれるためにこの蝶をいれてくれたの。だから全然いやじゃないの。」

風香「その人は？」

結花子「わからない。」

風香「会いたい？」

結花子「もういいの。この蝶で十分。その人が私を大切にしてくれているから。」

風香「その蝶を見つめる。」

風香「その蝶々さわってもいい？」

やさしい笑顔でゆっくりと頷く結花子。

ゆっくりやさしく触り、軽く撫でる。

風香「お母さんの『おんのだい』と同じだね。」

笑顔の結花子と風香。

## ○同 別室

無人。

浴室のシャワーの音。

結花子の持ってきた花。

きれいにたたまれた玲子の服。

テーブルの上には『銀の匙』

## ○風香の寝室

先程のようになり、二人が身体を寄せ合うように抱き合っていて寝ている。

横がゆっくり開く。

結花子、目を開ける。

風香はそのまま寝入っている。

ゆっくり寝室に入ってくる玲子。

玲子、結花子の身体の下に合わせるように身体を屈着させる。

玲子の吐息を感じる結花子。

ゆっくり目を開ける結花子。

二人が寄り添いあいながら横たわっている。

## ○バイクショップ店内

結花子、荷物を持って入ってくる。

明日香「こんにちは。結花子さん、何ですか？」

結花子「お店に飾ってもらおっと思っで。いつもオートバイク預かってもらってますから。」

結花子、カウンターの上で荷解きをする。

ウォーターハウスの『オフフィシア』の絵。

明日香「バイク屋に絵なんだ。///ってなら思っ風、ウォーターハウスなんて誰も知りませんよ。」

結花子「ちゃんと明日香さんわかっただじゃないですか。

それでいいんです。」

明日香「でも、なんか結花子さんらしい。」

## ○新車のバイクと並んでいるオフフィシアの絵

## ○同 店内

カウンター越しの結花子と明日香。

二人ともオフフィシアの絵を見ている。

明日香「意外と合いますね。オフフィシア。」

結花子「その言ってもらえるよ・・・」

明日香、結花子のメガネを見て

明日香「結花子さん、実は、メガネ、私にしたらちょっといいなさい。もしよかったら好きなもの買ってきてください。払いますから。」

結花子「いいんです。今度持ってきます。」

明日香「でも不思議なんです。縦じゃなくて横なんです。」

結花子、真顔になり、唇を噛み締めつつむく。

結花子「明日香さん・・・」

明日香、何かを察する。

明日香「いいんです、なにを・・・（正気に）今が一番バイクいい季節です。」

結花子「・・・」

明日香「意外とバイクの季節って短いんです。年にほんの十何日です。」

結花子、うつむいたまま、

結花子「しめんなさい。私誰にも・・・。」

明日香「大丈夫です。私はいつもここにいます。結花子さん・・・明日お天気いいですよ。」

結花子、顔を上げ、

結花子「明日、旅に行きたいんですわ。」

明日香笑いが、

明日香「結花子さん、いつもツーリング、旅っていいですよ。バイクもまだオートバイクっていい。」

結花子「私にとってはやっぱり旅ですから。」

明日香「それだけ言葉を大切に言っているんですよ・・・。楽しんでみてください。旅。」

## ○オフフィシアの絵

## ○カリーシ

カリーシの壁に眠るものについておいてある結花子のバイク。

## ○道の駅

出口ローンを、は横に控える結花子。



ヘルメットを被る結花子。  
グローブをはめる結花子。  
バイクに跨る結花子。  
キックを踏む結花子。  
一発でエンジンがかかる。  
軽くアクセルを開ける結花子の手。  
サスペンションを払う結花子の足。  
ギアを入れる結花子の足。  
後方確認をして滑らかに走り出す結花子のバイク。

## ○道路

海岸線の直線道路。  
青い海と晴天の中、軽快に走る結花子のバイク。  
結花子のバイクの後ろからフルパニアの大剣オム  
ロードバイクがやってくる。  
結花子のバイクと並走する。  
結花子、ちらりと横を見る。  
優子のバイク。  
優子、ヘルメットの中で笑顔を作る。優子、フュー  
サインを送る。  
結花子、片手は離そうとして答えずにそのままの  
でない。  
優子、無理しなくていいと片手を軽く上げられる。  
優子、手招きをする。

優子のバイクが結花子のバイクを追い越す。  
結花子のバイクと距離を保ちつつ先導する優子の  
バイク。  
二人のバイクが海岸線を走り抜けていく。

## ○えりの自宅前

バイクが置いてある。  
椅子に座っているえり。  
本を読んでいる。  
本のタイトルは『銀の匙』  
えり、本を読むのを止め、バイクを眺める。  
ゆっくり背伸びをするえり。  
お腹をさするえり。

## ○バイクショップ店内

無人の店内。  
オフロードの絵。  
輝いている新車のバイク。  
棚には説明書、バイク書籍、書類フォルダーが並  
んでいる。  
その中に混じって『銀の匙』の文庫本が並んでい  
る。

(終)